

柞乃杜

秩父神社社報

柞乃杜(ははそのもり)

第 41 号

平成22年 7月20日

(川瀬祭)



ちぶねに

霧立ちあして

ほろほると

明けそめにけり

暁の空

黄雲

「武甲山」を恋ふる歌

山里^{やまざと} 知々夫平^{ちちぶだいら}の南面に屹立^{きつりつ}する雄大な武甲の嶺^{みね}

北武蔵^{きつしゅう}随一^{ずいいつ}の名峰と 千古^{せんこ}の昔から称^{たた}ふる神南備^{かむなび}

その神南備の山並みに 知々夫国^{くにたま}魂^{おほかみ}の大神が宿り給ふ

たたなづくその山並みに 籠^{こも}り国の知々夫^{ちちぶ}の里^{さと}

その里びとは 春の山入りに大神を棚田^{たなだ}に迎へ

秋の終はりに大神を歡^{よろこ}び送る

時^{とき}を経て その山並みを生活^{たつき}に喰^くらひつつ

今さらに その山並みを恋ふ 里びとのわれ

解説 秩父神社 (40)

◆ 星にまつわる社殿彫刻

権禰宣 甲田豊治

昨年より天文や宇宙に関する記念すべき出来事が続く。
平成21年7月、日本では昭和38年以来46年ぶりに皆既日食が観測され、天文ファンならずとも見る人に感動を与えた。

また、平成21年12月、日本人宇宙飛行士の野口聡一さんがソユーズにて宇宙ステーションに向かい、日本実験棟「きぼう」にてメンテナンズや実験に従事、約五カ月間という長期滞在記録を更新し、今年6月に無事帰還。

そして、今年限りで退役が決定しているスペースシャトルに日本人として最後の搭乗者となった山崎直子さんが



機織りの杼 (シャトル)

4月5日にドイツにカバリーに打ち上げられ、補給物資の移動作業や「きぼう」内での持参した琴の演奏などが印象的であった。また同時に

期に宇宙ステーションに日本人が複数名滞在したのも初めてである。

更に、6月には全世界の感星探査史上において大きな功績を成し遂げたのである。7年と言う月日を費やして小惑星「イトカワ」の探査に打ち上げられた「はやぶさ」が様々な故障に見舞われながらも、地球と太陽の距離のおよそ40倍にあたる60億キロメートルを無事帰還。また、その過程の中で「イトカワ」から採取した砂が「はやぶさ」のカプセル内に納められている可能性があり、その結果が期待されている。



張 鷯 (ちょうけん)

この様に、宇宙に行くことが現実とされる現代であるが、およそ900年前の日本に既に宇宙を旅した人物の物語が伝えられており、昨年の夏号「天の川」に関連した社殿彫刻の人物「張鷯」の続きを解説してみたいと思う。39号で解説した「張鷯」は、実在の人物で前漢代の政治家であることを紹介したが、日本に伝わった「張鷯」は宇宙を旅した人物として伝わったのである。

平安末期の歌学書で知られる源俊賴の『俊頼髄脳』や、またほぼ同時期に成立したと言われる『今昔物語集』第

十巻第四話に、張鷯と牽牛織女の話が見える。その内容は、次のようである。



秩父銘仙館の機織り風景

漢の武帝の時代に張鷯と言う人がいた。武帝は張鷯に天ノ川の源流の探索を命じ、張鷯はすぐに浮木に乗って河を遡る。どのくらいの時と距離を経たか、今までに見たこともない場所に辿り着くとそこには、あまり見慣れない装いをした機を織る女性と牛を牽いた翁が立っていた。

張鷯が「ここはどこか」と尋ねると「ここは天ノ川」と答えたので、また、「あなた方はどなたか」と尋ねると、「私たちは織女と牽牛」と言い、逆に「あなたは誰」と尋ねるので、「私は張鷯」と言い、皇帝の命により天ノ川の源流の探索に来た」と答えると、「ここがその天ノ川の源流ですから、もうお帰りなさい」と言われ、張鷯は引きかえして皇帝にこの事を奏上した。

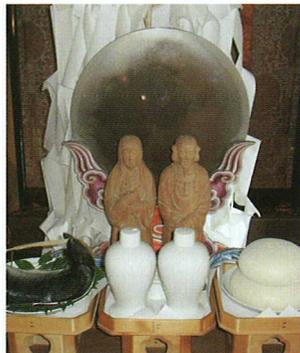
ところが時あたかも張鷯が天ノ川探索中、天文官が「七月七日の観測の折、天ノ川に客星が出現」と皇帝に奏上した。此れを聞いた皇帝は、凶事の予兆かと怪しまれたが、張鷯の報告を聞いて「天文官が「客星の

出現」と観たのは、実は張鷯の姿が見えたということで、本当に天ノ川の探索をできたのだ」と納得し安堵された。

このような次第で、天ノ川は天にあるのに、天に昇れないはずの人間がこの様に見えたということは、張鷯は将に只者ではないのではないか、世の人々が怪しんだと語り伝えられたとのことである。

この様に、大変面白く張鷯・牽牛・織姫の物語が語られている。さて、社殿彫刻の張鷯は、拜殿東側北面向きに見る事ができ、本殿からその方角の延長線には、夜祭齋場と武甲山を臨む。昭和五十一年までは、当社夜祭の御神幸行列は番場通りを進み、その傍らに流れる地蔵川に沿って遡って行くように齋場まで御神幸をしていた。

昔から伝えられた星の説話に関連した人物である張鷯が、星祭である夜祭の空間軸に併せ、武甲山の男神と妙見の女神が、まるで七夕同様に、年に一度の逢瀬を社殿より見守っているように感じてならないのである。



機業祖神祭の御神像

「武甲山再生フォーラム」開催に向けて

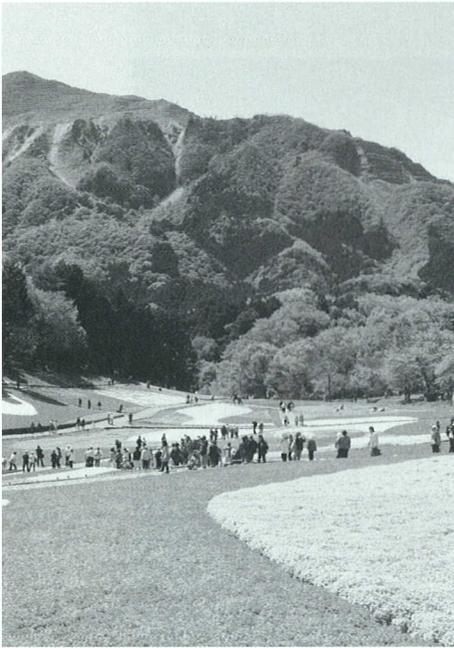
宮司 蘭 田 稔

秩父神社の神南備（かんなび 神体山）に当たる武甲山について、本誌で探りあげるのには三度目になります。最初は第22号の論説『「武甲山」を見据える——ふるさと再生の原点』で平成12年の大祭号、二度目は第38号の論説『破壊から創造へ——武甲山の修景を考える』という平成20年の同じく冬の大祭号でした。この再度の論説に掲げた表題からして、賢明な読者各位には、小職が繰り返し拙論で申し述べた趣きを想起して下さることを存じます。

今回は、いよいよ満を持して行動を起こすべく、同憂同志の各団体や個人の方々に対し、武甲山再生への具体的施策を共に論じ合うフォーラム開催を呼び掛けさせていただくことにします。

○

秩父山地を中心に奥武蔵随一の名峰と称えられてきた武甲山が、石灰岩採掘によって急速にかつての雄大な山容を喪失したのは、昭和五十六（1981）年から始動した鉾山三社のいわゆる「協調採掘」によるものです。これによって山頂に鎮座の御嶽神社奥宮が移転された上で、大規模採掘が可能となり、当時の海抜一三三六メートルの山頂が消滅して現在の一三〇四メートルとなつ



てしまっただけでなく、今見るように海抜一千メートルまで全面採掘が進んで無惨な残壁を曝す有りさまとなりました。この「協調採掘」実現に至るは、一〇年越しの困難な経緯については、当時の広汎な関係者たちのそれこそ苦渋の決断があったことはよく理解されるのですが、今となつては現実を直視し、最善の武甲山再生の将来像をめざして真剣に取り組むことが、せめてものわれわれの責務ではないか、と切に思うのです。

○

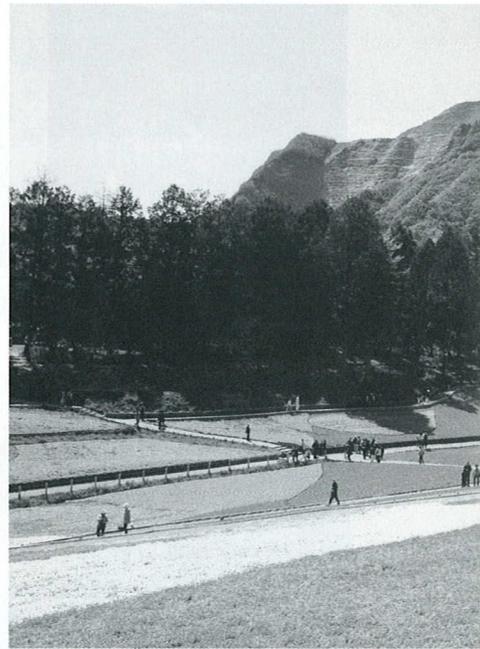
実は、去る六月七日（月）の午後、鉾山三社にお願ひして再度、採掘現場と残壁植栽の現状を視察することができました。前回は、十年ほど前に秩父未来会議の仲間を誘って現場視察をしました。今回は「秩父まるごと博物館」を通して二〇人ほど参加していただき、主に（株）菱光石灰工業の宇根鉾山を中心に実のある見学ができたと思います。その詳細はともかくとして、素晴らしい眺望の山頂から三〇〇メートル余りの落差まで、東西二・五キロにわたる採掘がベンチカット方式で大規模に進められたその残壁には、一〇メートルの段差ごとにヤマハンノキ、フサザクラなど数種の植栽が施されていてそれなりの緑化の努力を確認することができたのです。しかしながら、今後の採掘が進み当面の計画では海抜七〇〇メートルの地点まで残壁が広がることになり、近い将来に山頂から落差六〇〇メートルほどの巨大な残壁と前面の四〇ヘクタールを超える広大な跡地が出現することになります。それが仮に今から五〇年後、たとえて、果たして現行の植栽方法に頼るままで武甲山を再生できる

とは到底考えられないのではないか。

○

時あたかも本年九月から秩父太平洋セメント株式会社が太平洋グループの生産部門縮小の犠牲となつて、大正十二年以来の普通セメント製造を停止し、そのため武甲山の採石は横瀬の三菱セメントの外は専ら地元ならぬ熊谷と日高の工場での生産原料に使われるだけとなるようです。だがこれでは、かつて地場産業のために止む無しと、「協調採掘」を受け入れた地元住民の切ない想いが裏切られたこととなります。

そこで今こそ、われわれ地元住民が大同団結して武甲山再生への抜本的な方策を練り上げつつ、広く関係企業や県内外の専



甲山再生フオーラム「開催をお願いしているところですよ。どうか、その節は関係各位の積極的なご参加を頂きますようお願い申し上げます。

門家有志にも呼び掛けて、創意に富んだ夢のある再生事業に着手する秋ではないでしょうか。

幸いに、一昨年に、NPO（特定非営利活動法人）として結成された「秩父まるごと博物館」が着実な実績を挙げつつ、ジオ・パーク運動とともに秩父地域の自然・文化・産業、総ぐるみのネットワーク化を進めておりますので、本年度中には同館主催の「武

【表紙絵解説】



この度の表紙絵画は、秩父市内の学童・生徒による図画・作文展覧会の作品集「武甲山」から、平成21年度の図画の部におきまして、武甲山植物群保護対策推進協議会会長賞に選ばれた影森中学校三年生の大島耀君の作品を掲載させて頂きました。

大島君は、小学生の頃から、特にミュージズパークから眺める武甲山が好きで、よくスケッチしたそうです。この度の表紙絵画も同様にミュージズパークからの雄大な武甲山と木々の緑やかなコントラストが描かれております。

また、大島君は幼稚園の時からピアノを習い、絵画・音楽という芸術的才能を発揮され、また、昨年二年生後期には、生徒会会長もつとめられ、これから活躍が益々期待されます。

【表紙歌解説】

ら、ぶねに霧立ち、めてほのぼのと

明けそめにけり 暁の空 黄雲



表紙に載せた和歌は、当社の先々代宮司・藪田稲太郎翁の遺作。

黄雲とは翁の雅号だが、歌作の年代は不詳。なお翁は、明治五年四月十二日に当社累代の神主家の長男として誕生、同二十三年に國學院大學の前身である皇典講究所に國史國文を学び、同二十五年に帰郷して当社社掌、同四十二年に社司を拝命し、さらに同四十五年に三峯神社社司を兼務しつつ、昭和三年十一月十日に当社が國幣小社昇格に伴い宮司となり、終戦直後の同二十年十一月退職して正五位勲五等を昇叙されたが、同二十四年一月六日に享年七十七歳をもって帰幽した。在職中は皇典講究所の評議員、埼玉県神職會の理事、同秩父支部長を歴任して斯界に尽力しつつ、昭和八年に秩父観光協會を設立して初代会長を務めるなど地元文化の啓発に寄与し、特に大正十一年の秩父宮家創設に当たっては地元での奉祝記念事業にも功績を残した。当社と三峯神社の境内に翁の顕彰碑がある。

秩父宮会事業報告

◆ 視察研修旅行について



中央：秩父宮妃勢津子殿下
昭和33年10月28日 青龍窯にて

NHK大河ドラマ『天地人』の舞台となった米沢市を訪問先として、五月十七日〜十八日の日程で井上久会長以下会員三十九名により、視察研修に行つて参りました。
米沢藩の城下町として栄えた彼の地は、藩祖である上杉謙信公をお祀りする上杉神社をはじめとして、風格ある街並みを今に伝えていきます。
かつて秩父宮殿下には、御殿場の別邸にて療養生活を送る際、深く陶芸に御心をお寄せになり、邸内に築かれた

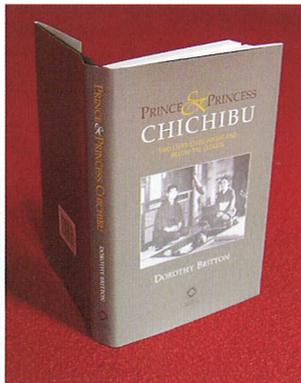
三峰窯を用いて多くの秀作を残されました。逸話によると、米沢の平清水焼を好まれ、薨去後も妃殿下が親しく窯元をお訪ねになられていることなどから今回の研修先と致しました。短い旅ではございましたが、思い出深い旅になったと思います。

秩父宮会では例年、会の事業として研修旅行を実施しており、ご関心のある方のご入会を随時受け付けております。

◆ 書籍献本について

平成三年に榎主婦の友社より出版された秩父宮妃勢津子殿下の御著書『銀のボンボニエール』を底本として、英文にて再編集された『Prince&Princess Chichibu』(写真参照)がイギリスで発売され好評のことです。

秩父宮両殿下のご実績を後世に伝える貴重な書籍であることから、宮中をはじめ各宮家に献本させて頂きました。秩父市立図書館内の秩父宮記念文庫にも納めてございますので、是非ご覧下さい。



就任 挨拶

氏子青年会会長 原 嶋 清

平成二十二年度総会におきまして、会員の皆様にご承認を戴き、第八代会長に就任致しました。

私はここ数年特に感じる事は、多くの女性会員や小中学生に事業への参加を頂いている事です。たとえば夏祭り冬祭り前の奉仕作業では、中学生に隈無く境内を綺麗にして頂いたり、玉串拝礼や作法等の勉強会では、この若い人達の中から未来の氏青を担っていく人材が育つよう願って止みません。

昨年当会も創立二十周年を迎え、会員数六百超の全国でも稀にみる大きな組織でありますが、職業、年齢、町会の枠を超え会員相互の交流を深め、又横の繋がりを密にし氏青の目的である「秩父神社を中心に文化的な秩父のまち造りを推進する」の志の下、明るく美しい地域社会建設の為に会員一丸と成って取り組んで行く所存でございます。

蘭田宮司様を始め、神社職員の皆様、協力会の皆様、又会員の皆様方のご指導、ご鞭撻、ご協力をお願い申し上げ新役員を代表してのご挨拶に代えさせていただきます。

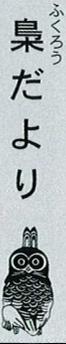
退任 挨拶

氏子青年会前会長 丸 岡 庸一郎

このたびの総会におきまして、原嶋新会長の誕生をもって、会長を退任することとなりました。二期四年の大任をつとめられましたのは、会員の皆様方、協力会の先輩方、蘭田宮司様、神社職員の皆様、関係各位の皆様方の暖かいご支援とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

任中を振り返りますと、様々な事業を皆様とともに進められたことは、貴重な経験になりました。一昨年、東京で行われました全国氏青協定期大会において、最優秀氏子青年会の表彰を受けることができ、また昨年には氏青創立二十周年を迎え、数々の事業とともに記念式典を開催し、多くの皆様方とお祝いできたことは、本当に良い思い出となりました。二十年を区切りに、氏青も新たな体制でスタートできますことは、誠に喜ばしいことです。

最後になりましたが、貴重な体験をさせて戴いた四年間、皆様方のご協力に感謝申し上げますとともに、秩父神社のご隆昌、原嶋新体制の氏子青年会が益々発展しますこと、会員の皆様方のご健勝とご活躍をご祈念申し上げます。退任のご挨拶とさせていただきます。



鳥だより

◆ 浅見権宮司浄階並びに 神職身分一級昇進



永年にわたる神明奉仕により、当社浅見武史権宮司には神職階位浄階並びに身分一級に昇進し、その授与式が本年三月十一日神社本庁神殿に於いて行われました。

◆ 氏子青年会協力会会長交代

本年六月、当社氏子青年会協力会は、新井康夫前会長から大島耕造新会長に変わり副会長も中忠司、松本晟、高野清二郎の三名が選任されました。

◆ 職員退職挨拶

前巫女 小暮 麻衣子 (旧姓 浅見)



高校を卒業してから十三年間、慣れない事ばかりでしたが皆様方にとっても親切にご指導を頂き、ご奉仕することが出来ました。これから、新しい環境の中で、

◆ 秩父神社妙見講

自 平成二十二年 二月 至 平成二十二年 六月

- 二月 十三日 拜城講
- 二月 十四日 坂戸妙見講
- 二月 十六日 宮側講
- 四月 十九日 皆野妙見講
- 五月 一日 上蒔田妙見講
- 五月 十六日 原谷講
- 五月 十六日 中西貞夫講元外四百六十五名
- 五月 二十三日 近戸講
- 五月 二十七日 鳥塚金男講元外四百四十八名
- 五月 二十七日 中宮地講
- 六月 十二日 新井喜代司講元外二百二十四名
- 六月 十二日 下宮地講
- 六月 十二日 村山勇治講元外七十八名
- 六月 十二日 別所講
- 六月 十三日 浅賀嘉友講元外八十六名
- 六月 十三日 熊木講
- 六月 十九日 高畑芳久講元外二百七名
- 六月 十九日 本町講
- 六月 二十六日 守屋英雄講元外百十二名
- 六月 二十六日 日野田妙見講
- 六月 二十六日 荒船啓介講元外二百三十四名
- 六月 二十七日 下郷講
- 松澤一雄講元外四百四名

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

本年より宮側講 鈴木建志様が新たに講元に就任されました。どうぞ宜しくお願致します。

- 小鹿野町両神薄 坂本大輔・あざさ様
- 中華人民共和国 泉 博隆・建利様
- 群馬県藤岡市 群馬県藤岡市 高野賢次・幸子様
- 秩父市本町 新井隆広・晃子様
- 秩父市道生町 関川 均・奈々様
- 秩父市太田 齋藤 健・温子様
- アメリカ合衆国 翁 茂人・峰子様
- スイス連邦共和国 ドルエネヤン・洋子様
- 秩父市下影森 設楽 寿・晶子様
- 秩父市寺尾 小池政博・美保子様
- 秩父市中町 堀口和哉・恵様
- 小鹿野町小鹿野 柳原 治・弓絵様
- 秩父市大野原 黒澤伸之・淳美様
- 秩父市山田 坂本欣也・萌子様
- 東京都世田谷区 橋本健太郎・由美子様
- 秩父市中村町 根岸 剛・千芽様
- 秩父市大野原 坂本 新・芽衣子様
- 秩父市荒川白久 新井健夫・和美様
- 横瀬町横瀬 小喜浩一・麻衣子様
- 小鹿野町般若若 柴崎大輔・悠希様
- 秩父市板谷 家内勝博・陽子様
- 末永く幸せなご家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

◆ 職員辞令

- 権宮司 浅見 武史 神職身分一級昇級 (三月十一日付)
- 巫女 浅見麻衣子 願により職を免す (三月三十一日付)
- 小林知沙 巫女見習を命ず (四月一日付)

◆ 氏子青年会役員名簿

| | |
|-------|-------------|
| 名譽会長 | 大田 稔 (宮司) |
| 顧問 | 淺見 武史 (権宮司) |
| | 正田 裕幸 (中町) |
| | 新井 直行 (彌宜) |
| 相談役 | 小川 裕司 (本町) |
| | 原嶋 修 (中宮地) |
| | 萩原 英一 (中宮地) |
| | 丸岡 理幸 (中町) |
| | 山本 清 (上町) |
| 直前会長 | 山本 修 (上宮地) |
| 副会長 | 山本 仁 (大畑) |
| | 吉田 恵一 (中村) |
| | 大島 隆芳 (本町) |
| | 小石川 康彦 (東町) |
| | 坂本 康孝 (上町) |
| 幹事 | 黒沢 善男 (中村) |
| 副幹事 | 関根 大介 (中町) |
| 事業部長 | 内田 光輝 (阿保) |
| 副事業部長 | 栗山 敏克 (宮側) |
| | 栗山 龍馬 (上町) |
| | 徳刈 実 (道生) |
| | 柿沼 賢次郎 (番場) |
| | 新井 伴明 (中村) |
| | 井深 昭 (熊木) |
| 総務部長 | 手島 孝 (上宮地) |
| 副総務部長 | 松村 剛 (中宮地) |
| | 浅見 典 (中宮地) |
| | 町見 博寿 (熊木) |
| | 岩田 勝宏 (権彌宜) |
| | 守屋 通夫 (権彌宜) |
| | 伊古田 建 (権彌宜) |
| | 茂木 博 (熊木) |
| | 茂木 利之 (中町) |
| | 木村 善明 (上町) |
| 常任幹事 | 五十名 |

良縁特別祈願祭 良縁相談のご案内

当社報第三十九号にて、第一回「良縁特別祈願祭」を開催した旨ご報告致しました。その後、第二回目を昨年十月二十四日に、第三回目を本年四月三日に執り行い、いずれも二十数名の参加をみました。この内、第二回目の中からは今秋に挙式・披露宴を行う運びとなった組があり、開催間もなく御神縁を得られたことは、誠に喜ばしい限りです。

また、「良縁特別祈願祭」とは別に、個人面談形式の「良縁相談」を始めました。毎月第二日曜日、午後一時より四時まで行っており、詳しくは、直接お問合わせいただくか、ホームページをご参照下さい。



秩父神社ホームページ

URL: www.chichibu-jinja.or.jp

◆ ははそのもり美術展のこと



名取二郎画伯『想呼弥卑』

この度は、ははそのもり美術展が記念すべき第10回を迎え、4月25日(5月9日)のゴールデンウィーク期間中に併せて平成殿二階を会場に盛大に開催されました。

浅見嘉正先生をはじめ、浅見文紀先生、新井清永先生、大野登先生、倉林愛二郎先生、近藤壽一郎先生、名取二郎先生、逸見桂一先生の地元在住の八名の先生方の秀作を出展して頂き、秩父郡市民をはじめ、参拝観光で当社を訪れた多くの方々に御覧頂きました。

◆ 水占みくじのお勧め

秩父は荒川の源流であり、ご神体山「武甲山」からの伏流水が湧き出る清流の里として知られ、平成二十年に「秩父伏流水」は『平成の名水百選』に選定され



ました。この清らかな水が流れる境内の柞の禊川で水に浸すと文字が浮き出る「水占みくじ」のおみくじをお勧めしております。

◆ 新人紹介



小林 知沙

平成4年1月27日生
秩父市久那出身
小鹿野高等学校卒業
趣味 音楽鑑賞

この四月より巫女見習いとして奉職させて頂くことになりました。私は、秩父神社で命名して頂き、お宮参り・七五三の節目のお祝い事もお世話になりました。

秩父神社は、沢山の緑に囲まれた落ち着く場所であり、私にとつて身近な存在と思っておりましたが、お宮の歴史などについては、ほとんど知りませんでした。しかし、時とともに興味深いものが沢山ある事に気が付き、諸先輩方の御指導のもと勉強して行きたいと思えます。

この伝統ある秩父神社で奉仕させて頂ける事は大変有難く思っております。またまた、不慣れですが、適切な対応が出来るように頑張りたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

編集後記

■平成13年から川瀬夏祭の宵宮行事として「天王柱立て神事」が斎行され、今年で十年を迎えました。秩父屋台囃子と元気な子供たちの奉仕により賑やかに今年も川瀬祭りを迎え、ここに社報柞乃杜第41号川瀬夏祭号をお届け致します。

■今回の神社解説で紹介しようとした「張養と牽牛織女」如何でしたでしょうか。この度の解説でも紹介しました今年で退役する「スペースシャトル」の形と七夕の織女の「機織りの杼シャトル」の形そして、張養が乗る「浮き木」の形がどうも妙に関連して見えてなりません。

■それはともかく、秩父は古くから養蚕と機織りが盛んなところで、現在も「秩父銘仙館」という施設では、養蚕の文化や機織り、藍染、型染、また秩父銘仙の「ほぐし捺染」という大変貴重な体験教室を実施しており、県内外から多くの方々が来場し、楽しみながら秩父の文化に直接に触れて頂いているそうです。是非この夏休みに皆さんで体験しては如何でしょうか。最後に、今回の取材にご協力頂きました秩父銘仙館さまに厚く御礼申し上げます。



※本報の用紙は再生マツト紙を使用しています

平成二十二年(二〇一〇)七月二〇日
編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所
〒366-0404 埼玉県秩父市番場町一三
TEL 〇四九四二二一〇二六二
FAX 〇四九四二四一五五九六
印刷所 有限会社 拓文社印刷所
〒366-0404 秩父市東町二七一八